

**郡山城第59次**  
(仮称) 霞ヶ丘建替団地新築工事に伴う調査

2007年  
大和郡山市教育委員会

# 郡山城第59次

(仮称) 霞ヶ丘建替団地新築工事に伴う調査

## 例言

1. 本書は、大和郡山市建設部住宅課が主管する（仮称）霞ヶ丘建替団地新築工事に伴い平成15～16年度に実施した郡山城第59次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、下記のとおり実施した。

調査名	郡山城第59次
調査地	冠山町字大戦冠598-6
調査期間	試掘確認調査 平成15（2003）年10月5日～10月31日 本調査 平成16（2004）年10月25日～11月30日
調査面積	試掘確認調査 258㎡ 本調査 180㎡
調査原因	（仮称）霞ヶ丘建替団地新築工事，事業面積2,879.23㎡
調査事務	建設部住宅課
調査機関	大和郡山市教育委員会 教育長 山田勝美
調査組織	教育部長 松村達志 社会教育課長 石川武史（平成15年度）岩本正和（平成16年度） 課長補佐兼文化財係長 奥田純男
調査担当	主査 服部伊久男
調査補助員	岡本智子（奈良大学大学院・現大阪弥生文化博物館） 下高大輔（奈良大学生，現太宰府市教育委員会） 大江綾子（奈良大学生）
3. 本報告書作成作業は下記のとおり分担して行った。

遺物実測・製図・レイアウト	長谷川義明（奈良大学大学院，現奈良県立橿原考古学研究所）， 神野悠（奈良大学）
遺物写真撮影	長谷川
原稿執筆	服部（第1・2・3・5章）・長谷川（第4章）
編集	服部
4. 調査及び遺物の所見について、財団法人元興寺文化財研究所主任研究員佐藤亜聖氏より多くのご教示を賜った。記して感謝いたします。
5. 遺構実測図中の座標は世界測地系第VI座標系に基づくものであり、海抜高は東京湾平均海面高度（T.P.）を基準とする。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過（服部）	1
第2章 位置と環境（服部）	2
第3章 調査（服部）	5
第4章 出土遺物（長谷川）	12
第5章 結語（服部）	22

## 図目次

図1 調査地位置図 (S=1/25,000)
図2 調査地位置図 (S=1/5,000)
図3 調査地位置図 (S=1/1,000)
図4 調査地位置図
図5 調査区平面図 (S=1/250)
図6 調査区土層断面図 (S=1/100)
図7 SK01平面図・断面図 (S=1/40)
図8 SK02平面図・断面図 (S=1/40)
図9 SD01北面南壁土層断面図 (S=1/20)
図10 SE01平面図・土層断面図 (S=1/50)
図11 SX01東面西壁土層断面図・北面南壁土層断面図 (S=1/50)
図12 SX02断面図 (S=1/50)
図13 SX03平面図 (S=1/30)
図14 SX03断面図 (S=1/20)
図15 SX03周辺土層断面図
図16 断面位置図
図17 SD01出土遺物
図18 SE01上層出土遺物
図19 SE01下層出土遺物①
図20 SE01下層出土遺物②
図21 SX01出土遺物①
図22 SX01出土遺物②
図23 SX02最上層出土遺物
図24 SX02整地土出土遺物①
図25 SX02整地土出土遺物②
図26 SX02最下層出土遺物
図27 SX03出土遺物

## 写真目次

- 写真1 郡山城と調査地（真上から）1997年撮影
- 写真2 郡山城と調査地（北上空から）1986年撮影
- 写真3 郡山城と調査地（南上空から）1986年撮影
- 写真4 調査前全景（北西から）
- 写真5 試掘確認トレンチ全景（北西から）
- 写真6 試掘確認第1トレンチ全景（西から）
- 写真7 試掘確認第2トレンチ全景（北から）
- 写真8 本調査区全景（北から）
- 写真9 SX01, 03（北西から）
- 写真10 SX02（北から）
- 写真11 SK01（南から）
- 写真12 SK02（南西から）
- 写真13 SD01（試掘確認トレンチ・北から）
- 写真14 SX02全景（北から）
- 写真15 SX02東壁（北西から）
- 写真16 SX02西壁（北東から）
- 写真17 SX03全景（西から）
- 写真18 SX03（南から）
- 写真19 SX03断割の状況（北から）
- 写真20 SX03断割の状況（東から）
- 写真21 SX03断割の状況（東から）
- 写真22 SX03断面（北から）
- 写真23 SX03断面（西から）
- 写真24 SX03完掘後（北から）
- 写真25 出土遺物（1）
- 写真26 出土遺物（2）
- 写真27 出土遺物（3）
- 写真28 出土遺物（4）
- 写真29 出土遺物（5）
- 写真30 出土遺物（6）
- 写真31 出土遺物（7）
- 写真32 出土遺物（8）
- 写真33 出土遺物（9）

## 第1章 調査の経緯と経過

大和郡山市建設部住宅課では老朽化した市営住宅の建替を進めている。その事業用地の一つが今回調査を行った市内冠山町の一画である。ここにはかつて擁護老人ホームである冠山園が建っていた。当該地の敷地面積は約2800㎡、地上3階建の共同住宅の建設が計画されている。周知の遺跡である郡山城の範囲に入っているため、事業の実施に際しては事前の発掘調査が必要となり、事業主管課である住宅課と協議を進め、まず平成15年度に遺構の有無と残存状況を確認するための試掘確認調査を実施することとなった。その結果、調査地の南側に遺構が密に検出されたため、翌平成16年度に本調査を実施した。調査は大和郡山市教育委員会が調査主体となって実施し、調査関係の事務は事業の主管課である住宅課が担当した。



図1 調査地位置図 (S=1/25,000)

## 第2章 位置と環境

調査地は郡山城中心部の西側の閑静な住宅地の一角、標高約73mの高台に位置し、南側、東側に眺望が広がる。現状は旧福祉施設を解体撤去した後の平坦な更地となっている。北側は道路を隔てて東側に向かって谷地形が広がっていたと考えられるが、埋め立てられて住宅や畑地となっている。西側は、西の京丘陵の主稜線に向かって緩斜面が続き、市営住宅が建っている。南側にも谷地形があり、住宅地、テニスコートに利用されている。東側は大きな段差をへて平坦となり、中堀の護欄が続いている。護欄は近年改修工事を受けて整備されている。調査地は地形的には東に向かってのびる短い舌状丘陵の先端に位置している。

さて、郡山城の調査はこれまで64次にわたって実施されている。過去の調査については文献を参照されたい(大和郡山市教育委員会2007)。城郭中心部での調査が17回、武家屋敷地での調査が30回、町屋地帯での調査が11回である。当該地周辺ではまだ大規模な古代の遺構は検出されていないが、良好な丘陵地となっていることから、今後、弥生時代や古墳時代の遺跡の存在も十分に想定されるところである。また、城内高校の体育館建設に伴う第23次調査では中世の堀状の遺構が検出されており、中世土豪の館跡の実態を知るうえで貴重な資料となっている。史料によれば、この地に割拠していた郡山中、辰巳、東などの地侍が室町中期以降「郡山衆」の名で呼ばれるようになり、やがて越智・筒井両党や松永久秀との関係の中で盛衰を繰り返



図2 調査地位置図 (S=1/5,000)

広げた。こうした郡山衆の居館がこの丘陵地に点在していたと考えられており、今後の検出が期待される  
ところである。

近世期には調査地一帯は武家屋敷地として利用された。城郭の中枢部に近く、比較的標高の高い武士の居  
宅となっていたようであるが、絵図を見ると当該地の敷地割りは不整形なものが多い(図4参照)。調査地  
周辺は小さな支丘陵と支谷が複雑に入り組んでおり、近世期にはこうした自然地形を巧みに利用して、武家  
屋敷地の造成を行っていたようである。なお、当該地の小字名は大戦冠である。これは天正16年(1588)、  
豊臣秀長が繪旨を発し、位階大戦冠を戴いた藤原鎌足を祀る多武峯を郡山城の鎮守神とするためこの地に遷  
座したことに因む地名である。

廃藩後、武士は禄を失い郡山を去り、ほどなくして武家屋敷地帯は荒廃し田畑に帰したが、徐々に住宅地  
として利用され今日に至っている。住宅も密集の度合いを増し、自然地形も大きく改変され、近世期の武家  
屋敷地の景観を髣髴とさせる景観は残されていない。今後も開発が続くと思われるが、より緻密な調査を積  
み重ねる必要が痛感される。

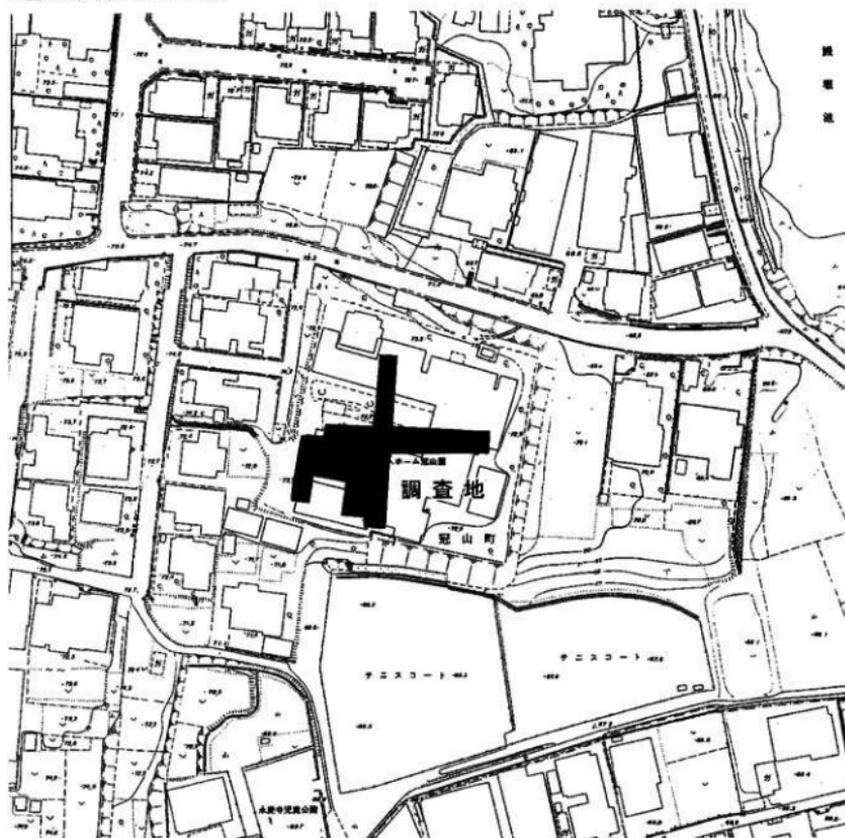


図3 調査地位置図(S=1/1,000)

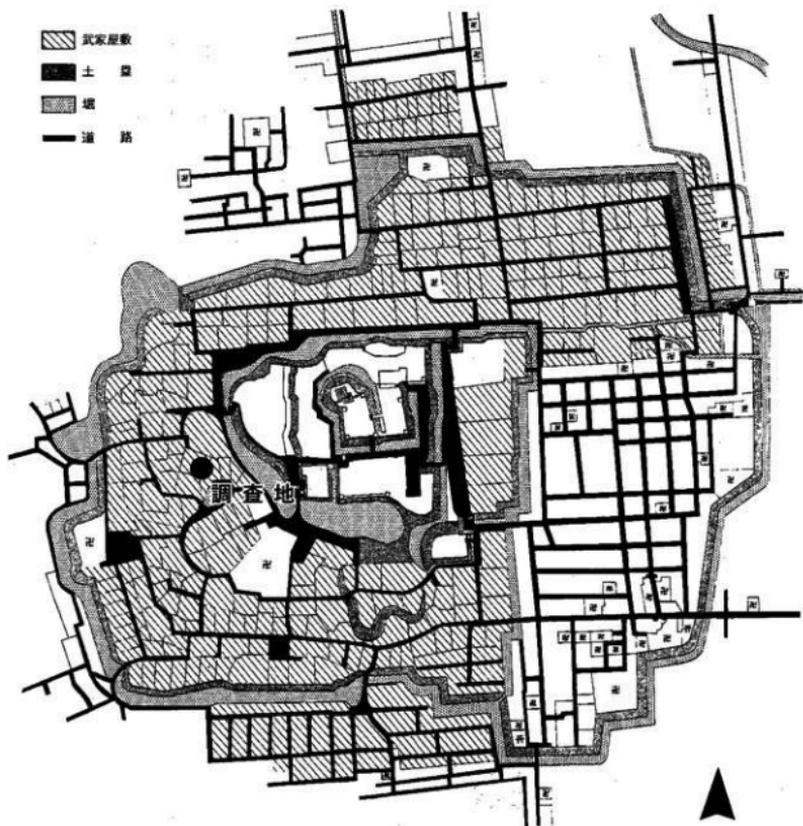


図4 調査地位置図 (下図：大和郡山城下模式図)

### 第3章 調査

調査はまず事業用地全体を対象として試掘確認調査を実施した。敷地のほぼ中央に十字形にトレンチを配し調査を実施した。幅4m、長さ34mの東西のトレンチを第1トレンチ、幅4m、長さ30.5mの南北のトレンチを第2トレンチとし、調査面積は258㎡であった。調査区には旧冠山園の建物基礎が縦横に配され、一部は大きくかく乱を受けていたが、中近世を中心とする遺構が検出された。特に第1トレンチ西端で検出した溝SD01、第2トレンチ南端のSE01、SX03の全容が不明であり、この部分の本調査が必要であると判断し、翌年、試掘調査区の南西側で小規模な本調査を実施した。調査面積は180㎡である。調査は試掘確認、本調査という二段階方式で、2ヶ年を費やして行ったが、報告に当たっては一本化して報告したい。

試掘確認調査時の第1トレンチ、第2トレンチの土層堆積は図6のとおりである。丘陵地であり、かつ、旧建物により平坦に削平されていたため著しい自然堆積土は認められなかった。表土下20～30cmで地山面に達する。第1トレンチの東半分では地山面が東側に向かって徐々に落ち込んでいく様相が認められた。これは本来の丘陵端部の状態を示すものであり、トレンチの東端では表土下1mで地山に達する。この落ち込み部分の直上に堆積する第8層から近代の陶磁器片が出土しており、近世期を通して自然地形がそのまま残さ

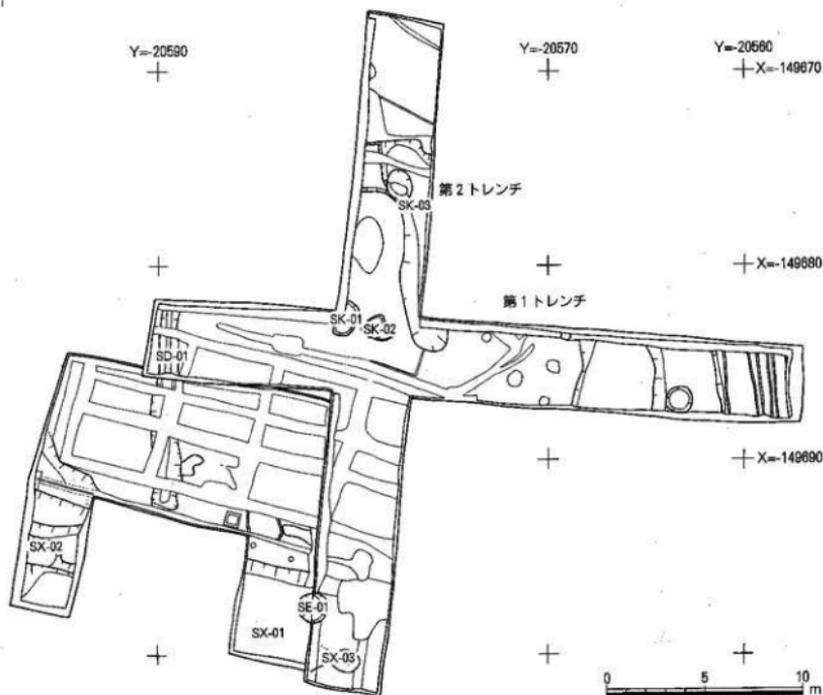
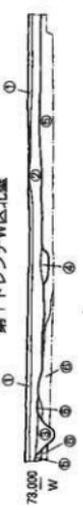


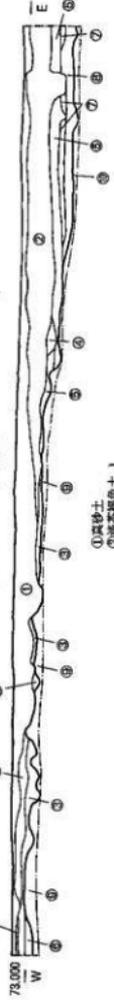
図5 調査区平面図 (S-1/250)

第1トレンチW区北壁



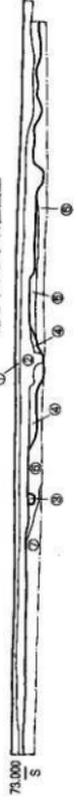
- ①真砂土
- ②明灰褐色土
- ③灰褐色土 (SD01)
- ④明灰褐色土 (腐乳)
- ⑤本層砂礫層
- ⑥明灰褐色土層
- ⑦地山

第1トレンチE区北壁



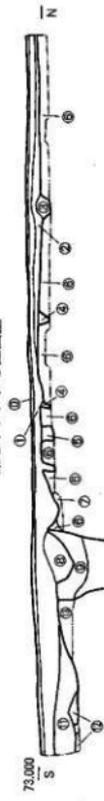
- ①真砂土
- ②油本褐色土
- ③明灰褐色土
- ④灰褐色土
- ⑤灰褐色土
- ⑥明灰褐色土
- ⑦油本褐色土
- ⑧油本褐色土 (明灰褐色土片、瓦片含む)
- ⑨明褐色砂礫層
- ⑩明灰褐色土
- ⑪地山

第2トレンチN区西壁



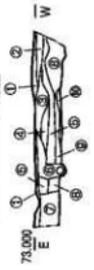
- ①真砂土
- ②油本褐色土
- ③灰褐色土 (ピット、中世め)
- ④灰褐色土層 (SK03積層土)
- ⑤灰褐色土
- ⑥灰褐色土層
- ⑦赤褐色土
- ⑧真砂土
- ⑨灰褐色土 (近現代腐乳)
- ⑩明灰褐色土
- ⑪黄色土層
- ⑫地山

第2トレンチS区西壁



- ①真砂土
- ②油本褐色土
- ③明灰褐色土
- ④明灰褐色土 (②より地山ブロック多い土)
- ⑤油本褐色土 (地山ブロック含む)
- ⑥明灰褐色土
- ⑦コングリート
- ⑧明灰褐色土 (土層片・破片・絶上ブロック多く含む)
- ⑨油本褐色土 (⑧層に比べ堆積物は少ない、さらさらとした砂質流入土の層相)
- ⑩赤褐色土 (赤く焼けしまる)
- ⑪地山

第2トレンチS区南壁



- ①真砂土
- ②油本褐色土 (赤土)
- ③灰褐色土
- ④明灰褐色土
- ⑤明灰褐色土 (腐乳)
- ⑥黄色土層
- ⑦明灰褐色土 (腐乳)
- ⑧油本褐色土層 (腐乳)
- ⑨明灰褐色土層 (腐乳)
- ⑩明灰褐色土 (腐乳・灰化層含む)
- ⑪油本褐色土 (腐乳・灰化層多く含む)
- ⑫明灰褐色土層 → 地山

図6 調査区土層断面図 (S=1/100)

れていたことが判明した。一方、第2トレンチの南半部では丘陵の南緩斜面を検出し、本調査区でその斜面の続き(SX01・02)を追認している。

検出した主な遺構は土坑3基、溝1条、井戸1基、炉状遺構1基などである。

#### SK01 (図7)

調査区中央部で検出した1.8m×1mの不整形な土坑で、灰色砂質土が堆積する。瓦器碗の小片が少量出土している。

#### SK02 (図8)

調査区中央部で検出した1.6m×1.1mの不整形な土坑で、SK01と同じ灰色砂質土が堆積する。土器片が少量出土している。

#### SK03

SK01, 02の北側で検出した溝状の土坑。北側から南へ屈曲し調査区の中央で終結する。深い部分で50cmの深さがある。SK01, 02と類似した灰色粘質土が堆積する。この三つの土坑の年代ははっきりしないが、堆積土がほぼ同じであり、相互に近い年代の所産と思われる。

#### SD01 (図9)

調査区の西辺で検出した幅1.0m、深0.5mの溝で、南北11mにわたって検出した。ほぼ直線的に伸び、丘陵南側の斜面がはじまるあたりで終結する。溝底のレベルは北側がわずかながら高くなっているが、ほぼ水平である。溝内は明灰茶色土、青灰色粘質土、淡灰茶色砂層が堆積する。最下層は地山の流入土である。滞水の状況は認められない。13世紀から近世にかけての遺物が少量出土している。近世期の遺構と考えられる。

#### SE01 (図10)

直径1.3mの素掘りの井戸である。試掘時に東半分を掘り下げ断面図を作成し、本調査時に残り半分を掘り下げた。約2.5m掘り下げたが危険と判断されたため掘り下げを中断したので井戸底には達していない。堆積土は上下二層に分けられた。上下層の埋没年代は14世紀末から15世紀初頭ごろ。

#### SX01 (図11)

丘陵斜面である。地山は南側に向かって徐々に下がっていく。地山上には暗灰褐色土が厚さ20~50cm

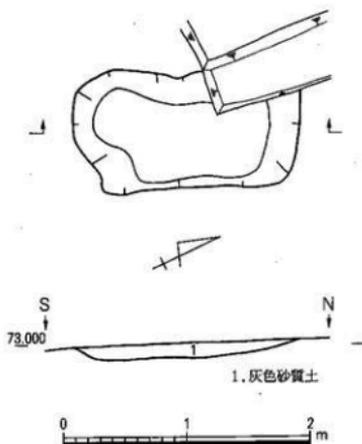


図7 SK01平面図・断面図 (S=1/40)

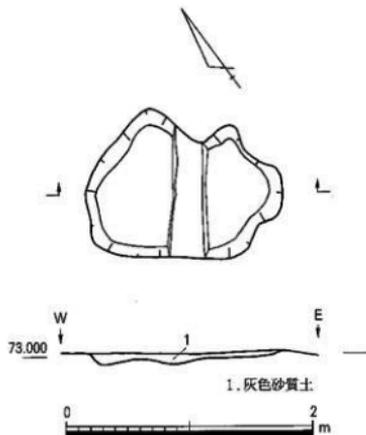


図8 SK02平面図・断面図 (S=1/40)

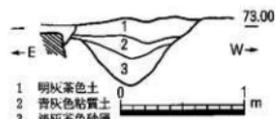


図9 SD01北面南壁土層断面図 (S=1/20)

堆積している。さらに上部には黄茶色土、黄灰白色粘土で整地される。整地の時期は近世である。

#### SX02 (図12)

SX01に続く丘陵斜面である。地山の傾斜は強く、約2.3m落ち込み、平坦となる。東面断面でみると、最下層のI層からは奈良時代の須恵器坏身が出土した。B層は中世の土器片や、炭灰を含む層であり、C～H層は自然堆積土と思われる。A層は近世の整地土と考えられる。

西面断面でみると、最下層にはI層が形成され、奈良時代の土器、12世紀末から13世紀初頭の遺物が含まれている。その上のR層は中世14世紀前半の羽釜片等を多量に含む傾斜堆積土であり、斜面上部から投棄されている。さらに上部のL～Q層は地山の削土を多く含む整地土であり、その時期は近世期と推定される。

この近世期の整地土を切り込む形で新しい時期の斜面が形成されている。最下層の直上の第14層淡茶褐色土層には近代の瓦片を含む。SX02はSX01に続く丘陵の斜面地ととらえることができる。西側に向かって徐々に斜面の傾斜が著しくなり大きくえぐりこむような斜面地が形成されていたと考えられる。底面は、ほぼ平坦となるが、調査地の南側にむかってさらに落ち込んでいくものと推定される。急斜面については中世に土器の廃棄・投棄場所として使われ、近世の武家屋敷地の利用に当たって造成を行っている。

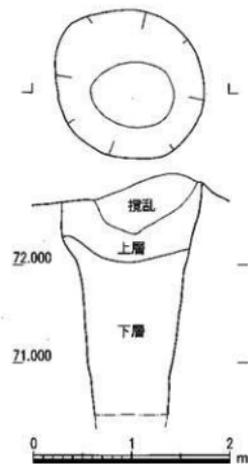


図10 SE01平面図・土層断面図 (S=1/50)

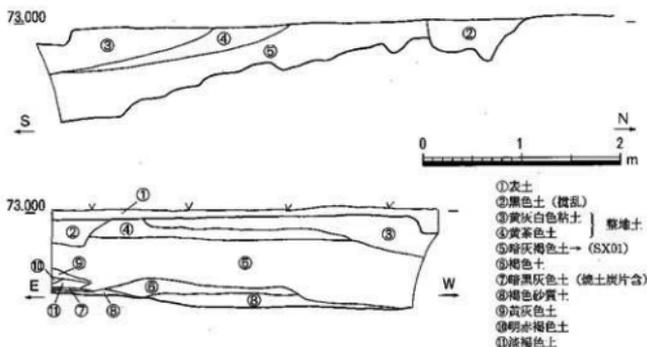


図11 SX01東面西壁土層断面図・北面南壁土層断面図 (S=1/50)

#### SX03 (図13・14)

熱を受けて赤変した幅約30cmの溝状の遺構が長径1.5m、短径1.1mの規模で検出され、さらに西側に赤変部が続き、杓文字状に検出された。また、東側はかく乱溝によって判然としませんが、西側と同じように赤変部が続いていた可能性がある。中央部には25×15cm、厚さ7cmほどの不整形な石材が置かれているが、石材自体は熱を受けていない。また、炭片、灰を含む層が平面図の一点鐘線の南側で検出されている。

赤変部の南北断面(図14下)をみると地山上に堆積した地山の流出土と思われる第⑤層の上に幅30cmの溝をスサ入りの土でつくる。第②層は、熱を受けて赤褐色を呈する。仔細にみると赤変部は内側から順に、灰

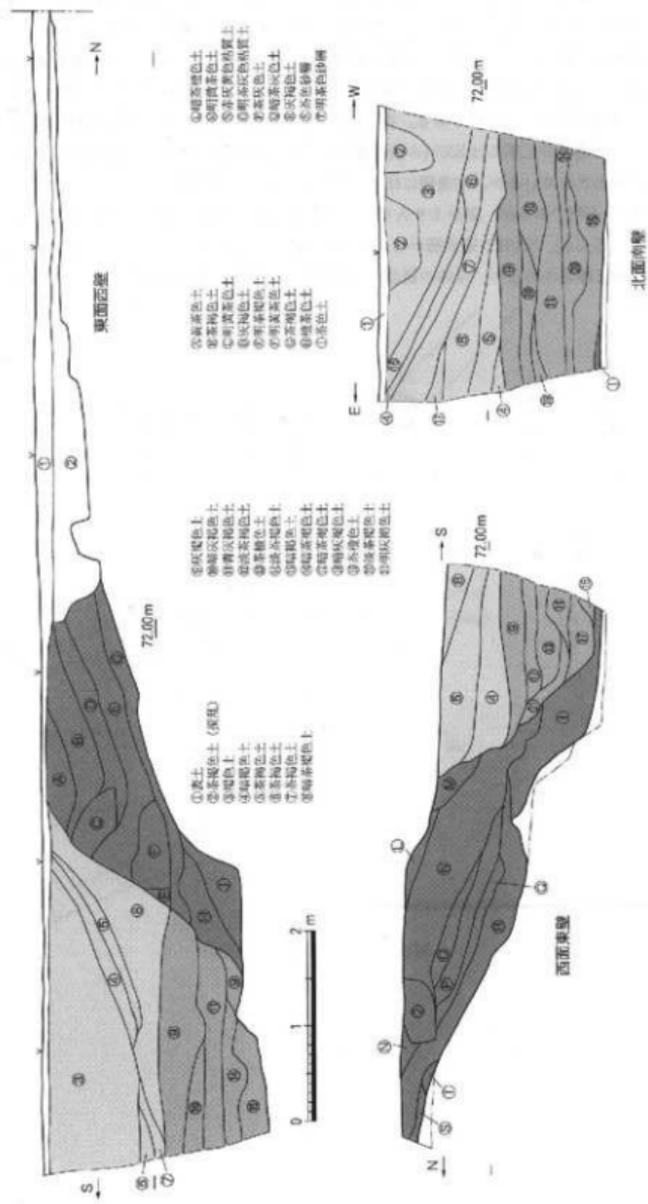


图12 SX02断面图 (S-1/50)

白色土、橙色土、赤褐色土に分かれる。受ける熱によって変色の度合いが違ってくる。溝内には橙色土層が堆積するが、この層が検出土に当たる。壁体等そのものではなく溝の上部構造が崩壊して堆積した土層である。東西断面（図14上）でみるとこの第②層は溝状とならないが、トレンチの東西壁面には第②層がレンズ状に検出されており（図15-1・3、第⑫層）、溝はさらに東西に伸びていた可能性がある。第③層は羽釜片、炭、炭化物を混じる土層である。第①層の下に形成されており、SX03の上限年代を明らかにする資料である。この遺構の上部にはSX01の斜面堆積土である第⑤層（図15）が形成されている。北西側に径20cmの小穴が検出されているが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。

SX03の性格は不明であるが、溝がスサ入りの土で造作され、溝内を流れる高熱の液体によって灰白色化、赤褐色化していること、SX01の第⑤層からフィゴ片が出土していること、などから考えると、金属の精製に関連する遺構と推定されるが、全体の構造は不明である。また、鉦滓等はまったく出土していない。

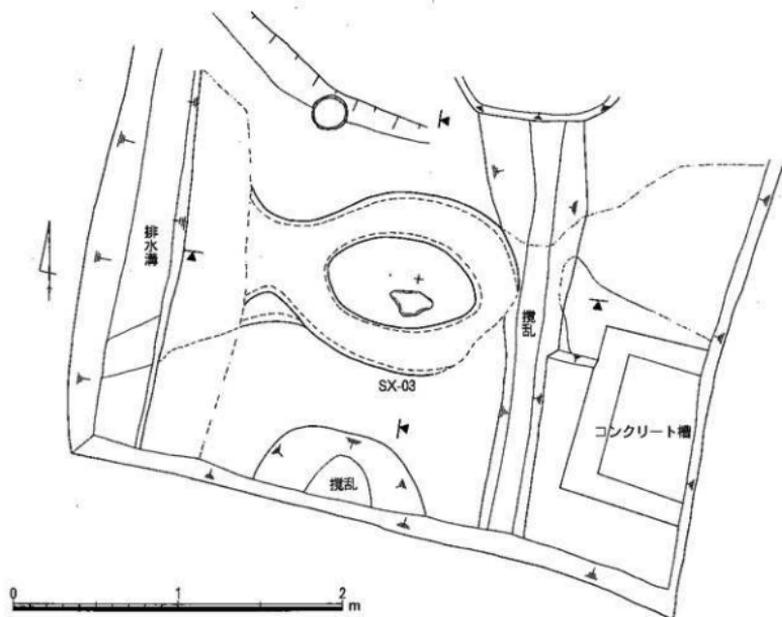


図13 SX03平面図 (S=1/30)

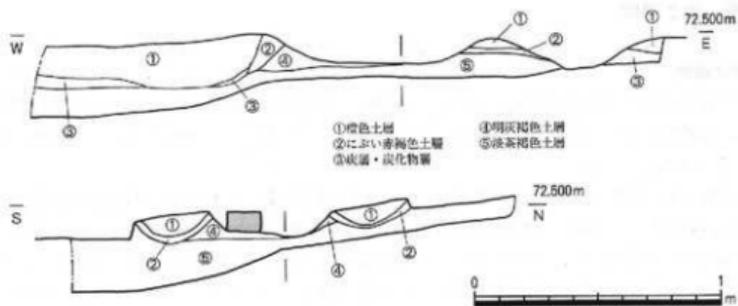
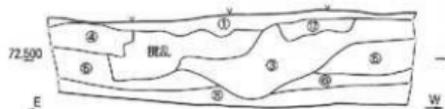
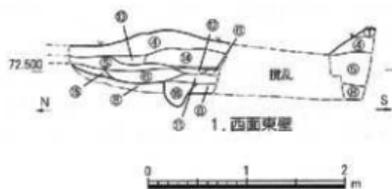
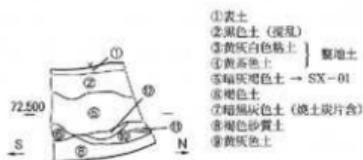


図14 SX03断面図 (S-1/20)



2. 北面南壁



3. 東面西壁

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| ① 表土            | ⑧ 明赤褐色土            |
| ② 黒色土 (泥炭)      | ⑨ 淡褐色土             |
| ③ 黄灰白色粘土 } 製地土  | ⑩ 褐色 (高壁)          |
| ④ 黄粘土           | ⑪ 黄灰色粘質土           |
| ⑤ 暗灰褐色土 → SX-01 | ⑫ 赤褐色土 (褐色の炭屑片を含む) |
| ⑥ 褐色土           | ⑬ 暗黄色砂質土           |
| ⑦ 暗褐色土 (焼土炭片含)  | ⑭ 黄灰色土             |
| ⑧ 褐色砂質土         | ⑮ 暗灰色土 (製地)        |
| ⑨ 黄灰色土          |                    |

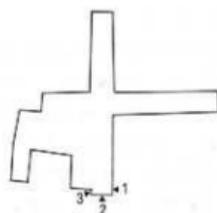


図16 断面位置図

図15 SX03周辺土層断面図

## 第4章 出土遺物

### SD01出土遺物

1は土師器の皿で、復元口径8.6cm、器高1.3cmを測る。雲母を若干含む精良な胎土で、外面底部はユビオサエ、内面底部は一方のナデ、口縁端部はヨコナデによって成形する。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。13世紀代のもの。

2は瓦質土器の底部で、器種は深鉢と考えられる。胎土は石英を若干含むものの精良で、底部には離れ砂の痕跡、内面はヨコナデ調整、外面には研磨による仕上げの痕跡が認められる。焼成は良好で、外面は灰色、底部と断面は灰白色を呈する。小片のため、その時期決定は難しいが、14世紀後半から16世紀にかけての中世後期のものであろう。3は瓦質土器の甕である。胎土は礫を多く含む粗い。内面ナデ調整、底部外面は無調整。焼成は甘く、低火度の酸化焰焼成により土師質となり、内面が灰白色、外面が浅黄橙色を呈する。近世のものと思われる。

以上のように、SD01には13世紀から近世にかけての遺物が混在しているが、長期間機能していたとは考えにくいことから、近世の溝に中世の遺物が混入したと考えられる。

### SE01上層出土遺物

4は土師器の皿で、残存率は90%。口径7.4cm、器高1.2cmを測る。胎土は精良で、外面底部をユビオサエ、口縁端部をヨコナデによって成形し、口縁部は外反させない。焼成は良好で、淡黄色を呈する。いわゆる「へそ皿」である。

5は菅原正明氏のカテゴリによる大和H2の羽釜である(菅原正明1983)。復元口径は17.8cmを測る。胎土は精良。内面にタタキ痕跡を有し、口縁端部をヨコナデする。焼成は良好で、浅黄橙色を呈す。6は菅原分類の大和Bの羽釜である。復元口径28.6cm。胎土は精密で、体部をタタキで成形し、口縁部はヨコナデする。焼成は良好で、浅黄橙色を呈す。

7は瓦質土器の方形火鉢で、内面と突帯付近をナデによって成形し、他の面を研磨によって仕上げる。外面の2条の突帯の間には、花菱文のスタンプを押印する。8は瓦質土器の方形火鉢で、突帯を貼り付けたのちナデ、内面をヨコナデによって成形し、その他の面を研磨によって仕上げる。

9は瓦質土器の火鉢で、復元口径19.6cmを測る。表面の摩滅が激しく、調整は不明である。焼成はあまく、色調は全体に灰白色を呈する。

10～12は瓦質土器の播鉢である。10は外面をユビオサエによって成形し、口縁端部をヨコナデによって成形する。播目は1単位3条が確認でき、上は口縁部付近にまで達する。焼成は良好で、色調は断面灰白色、内外面黒色を呈す。11は外面をユビオサエ、内面をナデによって成形し、外面底部は離れ砂の痕跡を有する。播目は1単位7条。酸化焰気味に焼成し、色調はにぶい黄橙色を呈する。12は外面をユビオサエ、底部をケズリによって成形し、内面は使用痕跡による摩滅で調整は不明。焼成は良好で、色調は灰白色を呈す。播目は1単位5条。

SE01上層の遺物は、10の瓦質土器播鉢が佐藤編年B期(佐藤聖1996)であり、14世紀の末から15世紀初頭の年代観が与えられる。共存遺物のほとんどが、この時期の土器様式を構成するもので、SE01上層の埋没年代が14世紀末から15世紀初頭なのはほぼ間違いない。

ただ、佐藤聖氏のご教示によれば、9の瓦質土器火鉢のみが16世紀後半以降にみられる器形で、大和の瓦質土器の中世末以降に多くみられる焼きがややあまい点などからも、混入品である可能性が高い。SE01上層の直上に攪乱土坑があることから、ここから混入したものであろうか。

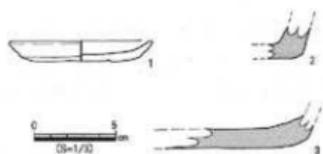


圖17 SD01出土遺物

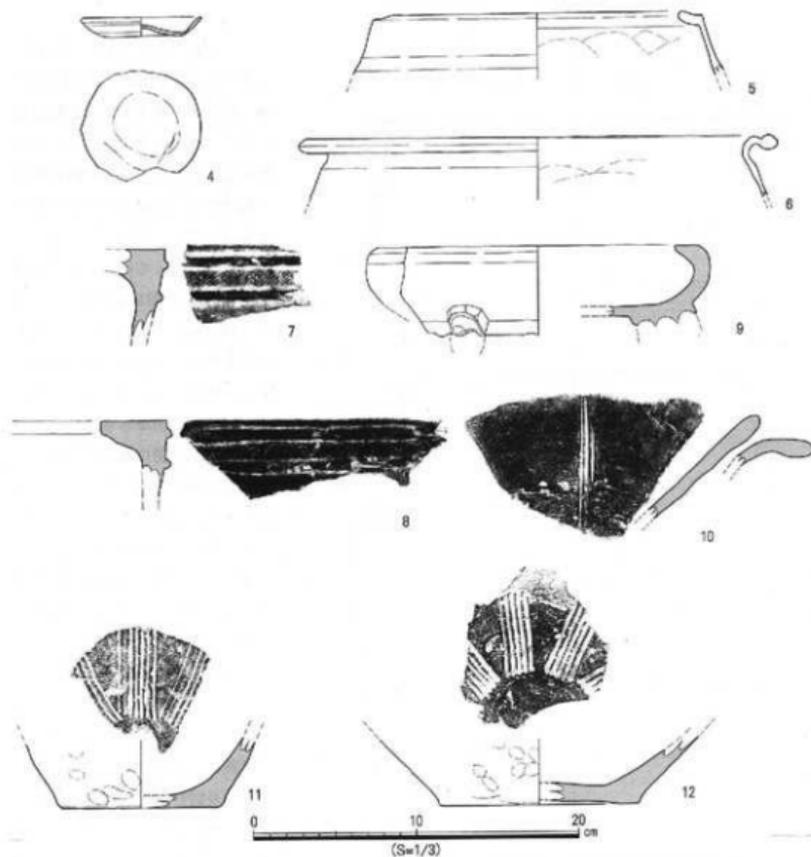
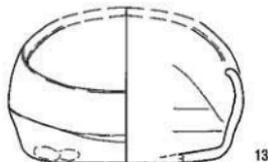


圖18 SE01上層出土遺物

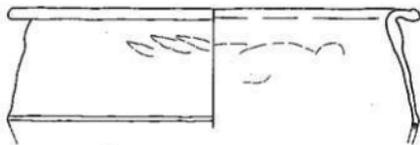
## SE01下層出土遺物

13は土師器で、器種は香炉と考えられる。底部は平坦で、口縁部は傾斜する。粘土を輪積して形をつくり、底部は無調整でモミ圧痕を有し、外面をユビオサエ、内面と口縁端部をヨコナデによって成形する。焼成は内面がやや還元焰気味に焼成するものの、おおむね良好で、色調は灰白色を呈する。奈良県天理市・布留遺跡でも出土例がある（埋蔵文化財天理教調査団1985）。

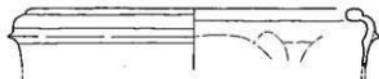
14は菅原分類の大和Bの羽釜である。口径は復元24.4cm。体部をタタキによって成形し、口縁部をほぼ水



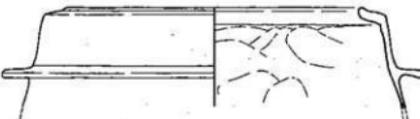
13



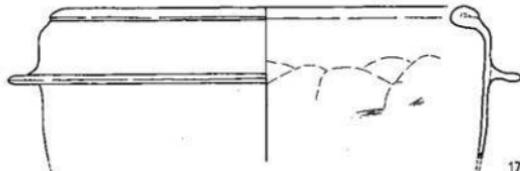
14



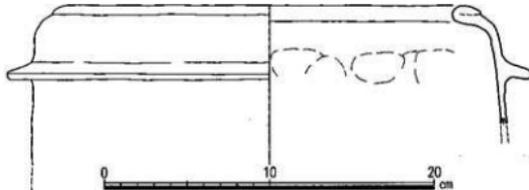
15



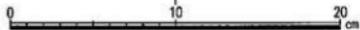
16



17



18



(S=1/3)

平に大きく外反させ、端部を肥厚させて収める。鏝はすでに形骸化し、器壁より2mm程度厚いにすぎない。

15から18は菅原分類の大和Hの羽釜である。15は、復元口径19.2cm。長石・石英を若干含む精良な胎土で、体部はタタキによって成形する。口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、口縁直下の径が最大となるところに鏝をつけたのち、ヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。16は復元口径18.0cm。長石・石英を多く含む、やや粗い胎土である。体部をタタキによって成形し、口縁部は肥厚させない。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。17は復元口径23.8cm。雲母・長石・赤色酸化土粒などを含み、胎土は粗い。体部をタタキによって成形し、口縁部は外側に折り曲げて肥厚させる。鏝を貼り付け、口縁部と鏝付近をヨコナデする。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。18は復元口径24.0cm。体部をタタキによって成形し、口縁部は外側に折り曲げて肥厚させる。鏝を貼り付け、口縁部と鏝付近をヨコナデする。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

19は古瀬戸で、器種は折縁深皿か。口径は復元24.8cm。ロクロによって成形し、体部下半を回転へ

図19 SE01下層出土遺物①

ラケズりする。表面には緑色の釉を施すが、内面下半は使用痕によるものか磨耗し露胎している。古瀬戸後期のⅡ期（藤澤良祐1991）。古瀬戸後期のⅡ期は、滋賀県野洲郡中主町・吉地薬師堂遺跡出土の「至徳四年（1387）九月御新之内」墨書銘のある灰釉直縁大皿や、応永23年（1416）の上杉禅秀の乱によると考えられる炭化層出土の資料などから、14世紀末から15世紀初頭の年代観が与えられる。

20, 21は瓦質土器の播鉢である。20は復元口径31.0cm。底部には離れ砂の痕跡を有し、体部下半はユビオサエの痕跡を有する。口縁部付近はヨコナデにより調整し、口縁端部には面をもつ。焼成は良好で、色調は

黒色を呈するが、重ね焼の痕跡により一部灰白色を呈する。また、内面下半は使用痕による摩滅で灰白色を呈している。播目は9条。21は口径32.2cm、器高13.0cm、底径12.3cm。底部は離れ砂の痕跡を有し、体部外面の下半にはユビオサエ痕跡を有する。口縁部付近はヨコナデ調整し、口縁端部には面をもつ。焼成は良好で、色調は黒色を呈する。底部は使用痕によって摩滅し、灰白色を呈している。播目は7条。

22は瓦質土器の深鉢で、復元口径60.2cmを測る。胎土は精良で、内面は縦方向にナデ、口縁部をヨコナデし、外面は研磨する。焼成は良好で、色調は黒色を呈する。胎土は灰白色。

SD01下層の出土遺物は、非常に一活性の高い土器群と考えられる。大和では普遍的に出土し、編年の指標である瓦質土器播鉢の佐藤編年B期の資料が、実年代を14世紀末から15世紀初頭と考えられている古瀬戸後期Ⅱ期の折縁深皿と共伴していることから、年代観を裏付ける資料として評価できる。

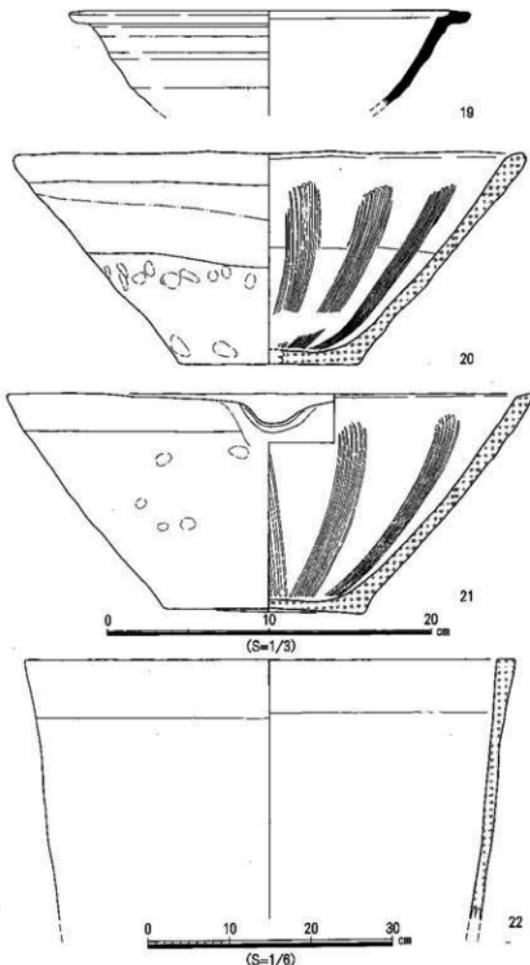


図20 SE01下層出土遺物②

### SX01出土遺物（図11第⑤層出土）

23は瓦器碗で、口径12.2cm、器高3.5cm。外面には、粘土紐の巻き上げ痕跡および放射状の指頭圧痕が認められる。暗文は渦巻状。川越編年のⅢ-C（川越俊一1983）。

24は瓦質土器の钵鉢。底径は復元10.2cm。外面にはユビオサエの痕跡が認められる。内面は使用痕により摩滅し、底部にのみ指目が残る。

25～32は土師器の皿。25は復元口径9.4cm。色調は淡黄白色。26は復元口径10.6cm、器高1.7cmを測る。色調は浅黄白色を呈する。27は口径12.7cm、器高2.0cm。色調は橙色を呈する。28は復元口径12.8cm、色調は灰白色を呈する。29～32には、いずれも底部に結合痕跡がみとめられ、いわゆる切り込み円板技法によるものである。29は復元口径14.2cmを測る。色調は橙色を呈する。30は復元口径9.4cm、器高1.2cm。色調は浅黄橙色を呈する。31は復元口径11.8cm、器高1.9cm。色調は灰白色を呈する。32は復元口径8.0cm、器高1.3cm。色調は浅黄橙色を呈する。

33は土師質で、高台の部分である。器種は皿と考えられる。高台の径は復元6.2cm。焼成はややあまく、断面は還元気味の焼成により黒色を呈する。表面の色調は灰白色。

34～37は、いずれも土師器の鉢である。34は復元口径23.6cmを測る。体部外面はユビオサエ、口縁部はヨコナデし、外側に肥厚させて玉縁状におさめる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。35は復元口径19.6cmを測る。外面の体部下半には結合痕跡が認められ、口縁付近をヨコナデする。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈す。35は復元口径25.6cmを測る。口縁部をヨコナデし、外面の体部下半はユビオサエを明瞭に残す。焼成は良好で、色調は灰白色。37は復元口径40.0cmを測る。内面には結合痕跡が認められ、外面にユビオサエを残し、口縁部をヨコナデによって仕上げている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色。

38、39は土師器の羽釜である。38は菅原分類の大和Hで、口縁部を外側に肥厚させる。復元口径27.6cm、体部をタタキによって成形し、口縁部をヨコナデする。焼成は良好で、色調は淡黄色。39は菅原分類の大和Bで、復元口径31.6cm。体部をタタキによって成形し、口縁部と脛をヨコナデする。焼成は良好で、色調は灰白色。

SX01に含まれる土器群には、時期のわかる遺物として、大和Ⅲ-C型式の瓦器碗や高台つきの土師器皿など13世紀代の遺物や、中世後期の瓦質土器の钵鉢などがあり、大幅な時期差がある。土師器の皿といった祭祀性の強い遺物や、土師質の鉢といった特殊な器種が多く含まれていたことから、長期間にわたってこの傾斜面において何らかの祭祀が行われた可能性が高い。

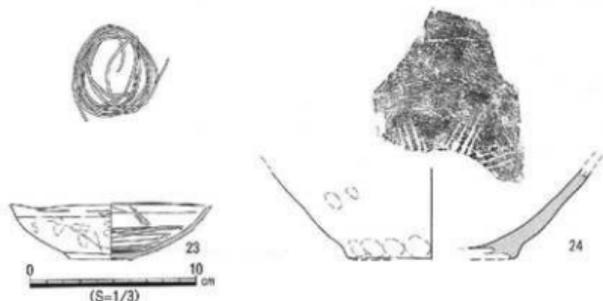


図21 SX01出土遺物①

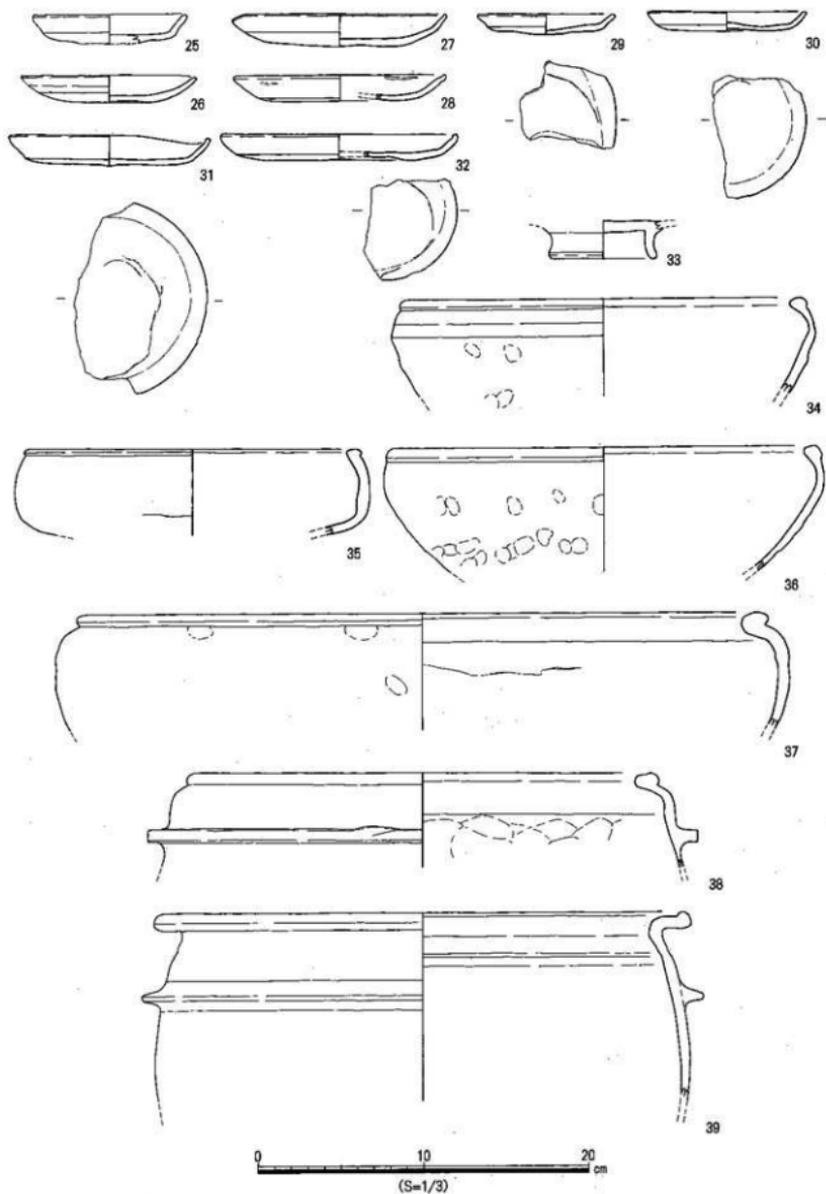


图22 SX01出土遺物②

SX02最上層出土遺物 (図12第③~⑧層出土)

40は土師器の皿で、口径10.8cm、器高2.2cmを測る。口縁部をヨコナデ調整、底部をユビオサエ調整する。

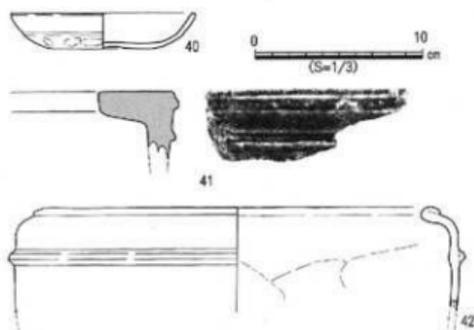


図23 SX02最上層出土遺物

焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

41は瓦質土器の方形火鉢。外面の2条の突帯間に四菱文のスタンプを配する。内面および突帯付近にはヨコナデ調整、外面および上面は研磨によって仕上げる。

42は土師器羽釜で、菅原分類の大和H。復元口径23.0cm。体部をタタキによって成形し、口縁部を外側に折り返したのち、ヨコナデする。罫は貼り付けた後、ヨコナデによって密着させる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

SX02整地土出土遺物 (図12⑩層出土)

43~51は土師器の皿である。43は口径7.0cm、器高1.3cmで、色調は灰白色。44は口径7.2cm、器高1.6cmで、色調は浅黄橙色。45は復元口径8.4cmで、色調は橙色。46は口径9.4cm、器高1.8cmで、色調は浅黄橙色。47は口径が長軸で12.0cm、短軸で11.0cm。器高は2.1cmを測る。色調は浅黄橙色。48は口径10.2cm、器高2.3cmとやや深い。色調は灰白色。49は復元口径10.7cm、器高2.6cmで、色調は橙色。50は復元口径12.0cm、器高2.2cm。色調は橙色を呈するが、底部に黒斑を有し、黒色を呈する。51は口径10.8cm、器高1.9cm。外面底部に切り込み円板技法による結合痕跡が認められる。色調は橙色。

52~58は土師質の羽釜である。52~54は菅原分類の大和Bである。52は復元口径30.6cm、色調は橙色を呈する。53は復元口径28.6cm、色調はにぶい黄橙色を呈する。54は復元口径32.0cm、色調は浅黄橙色を呈する。いずれも焼成は良好で、体部をタタキで成形したのち、口縁部と罫をヨコナデによって仕上げる。55~58は菅原分類の大和Hである。55は口径24.6cmを測り、口縁は肥厚させない。底部には煤が付着する。色調は淡橙色。56は復元口径20.0cmで、体部はタタキのちケズリを施して成形する。口縁部を外側に折り曲げて肥厚させる。外面下半には煤が付着する。色調は淡橙色。57は復元口径23.4cm。口縁を外側に折り曲げて肥厚させ、焼成はやや甘く、色調は淡黄色。58は復元口径30.4cm。口縁を外側に折り曲げて肥厚させ、色調は浅黄橙色。

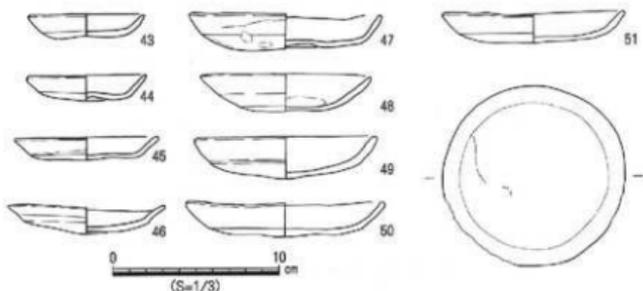


図24 SX02整地土出土遺物①

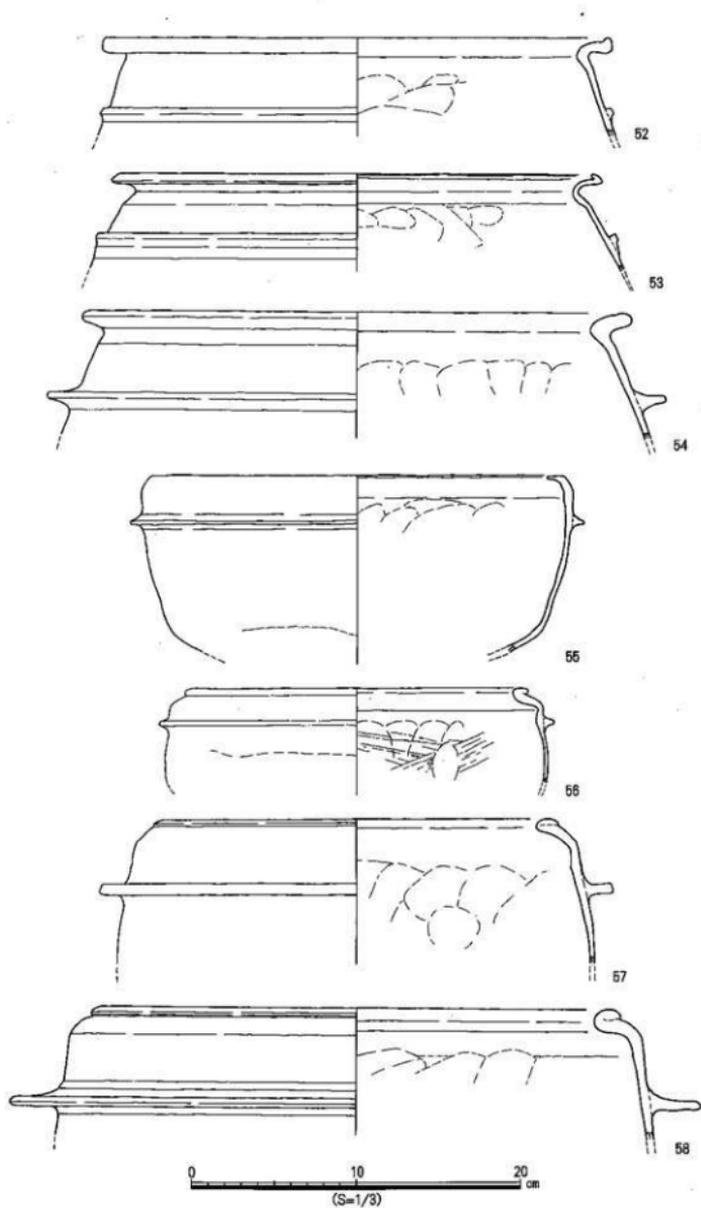


图25 SX02整地土出土遺物②

#### SX02最下層出土遺物（図12㊦層出土）

59は須恵器の坏身。胎土には長石・黒色砂粒を含み、やや粗。回転台によって成形し、底部には高台を貼り付けたのち、ヨコナデによって密着させる。焼成は良好で、色調は外面が灰色、内面が灰白色を呈する。奈良時代。

60は瓦器碗で、口径は復元14.0cm。色調は灰白色を呈する。外面にはユビオサエを明瞭に残し、口縁部をヨコナデする。外面のミガキは下半にまで及ぶが、内面の磨きはやや雑である。Ⅲ-Aの新相（近江俊秀1991）で、12世紀末～13世紀初頭。

61、62は菅原分類の大和Hの羽釜である。

61は復元口径20.6cm。長石・雲母を含むやや粗い胎土で、外面をタタキによって成形し、口縁を外側に折り返し、鏝を貼り付け、ヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。

62は復元口径23.6cm。長石・石英を含むやや粗い胎土で、体部をタタキによって成形し、口縁部を外側に折り曲げ、鏝を貼り付け、ヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

63は菅原分類の大和Bの羽釜。口径は復元33.0cm。体部をタタキによって成形し、口縁をヨコナデ、貼り付けた鏝をヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は灰白色。12世紀代か。

#### SX03出土遺物（図14第③層出土）

64、65はいずれも菅原分類の大和Hの土師器羽釜である。

64は復元口径16.4cm。長石・石英を含むやや粗い胎土で、体部をタタキによって成形する。口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ、ヨコナデによって整える。また、鏝も貼り付けたのち、ヨコナデによって密着させる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

65は復元口径27.6cm。長石・石英などを含むやや粗い胎土で、体部をタタキによって成形し、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、ヨコナデによって仕上げる。鏝は貼り付けたのちヨコナデによって密着させる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

66、67はいずれも土師質で、器種は土釜と考えられる。

66は復元口径32.8cm。長石・石英・雲母などを多く含んだ粗い胎土で、口縁を内傾させ、端部を外側に肥厚させる。口縁付近をヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

67は復元口径37.2cm。長石・石英などを含むやや粗い胎土で、口縁を内傾させ、端部を外側に肥厚させる。口縁付近をヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

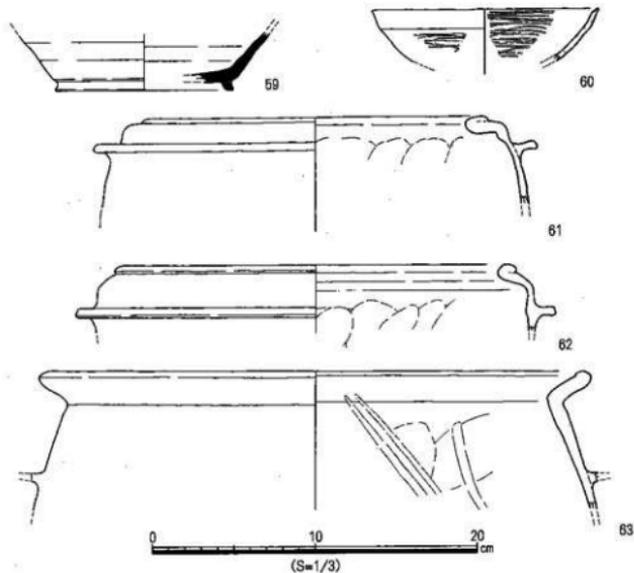


图26 SX02最下層出土遺物

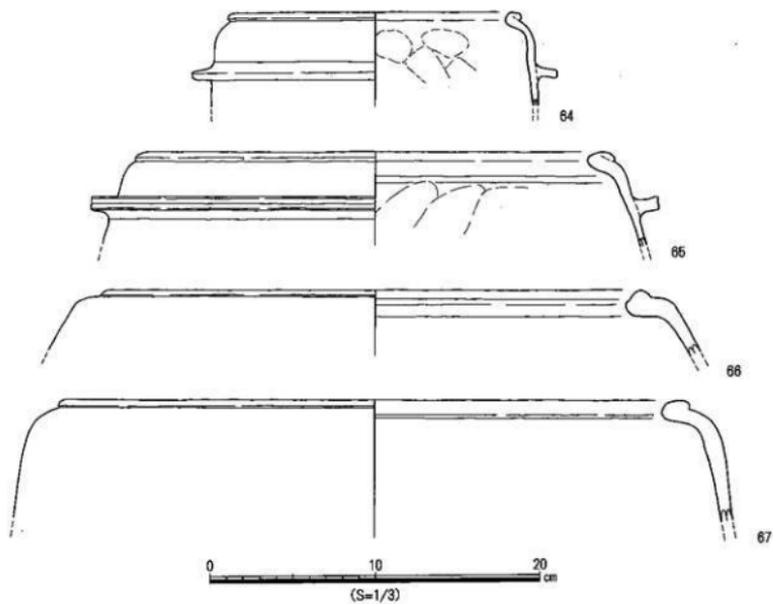


图27 SX03出土遺物

## 第5章 結語

調査地における土地利用の変遷をまとめておきたい。

- ①弥生時代、古墳時代、飛鳥時代の遺物、遺構は検出されていない。
- ②SX02最下層からは奈良時代の須恵器が出土している。当該地は平城京の範囲外に位置するが、平城京にきわめて近い場所にあり、小規模ながらなんらかの土地利用が行われていたのかもしれない。
- ③SX02最下層からは12世紀末～13世紀初頭の瓦器碗など出土しており、このころから当該地の利用が活発になるようである。SX01からは13世紀～中世後期の羽釜を中心とする遺物が出土し、SX02の斜面堆積土や整地土からは14世紀前半代の遺物が多く出土している。SE01は14世紀末～15世紀初頭に埋没しており、中世にはいって当該地が大きく利用されたことがわかる。
- ④SX03については、13世紀を下限とする土器を含む層の上に築かれており、上部に堆積したSX01には13世紀～中世後期の遺物が出土していることから、この時期の所産と考えざるをえない。
- ⑤近世には、武家地として利用される。丘陵の南側斜面上部を埋め立てたものの、東側については大きな造成を行わずに、自然地形をそのまま利用していたようである。ただし、この時期の遺構としてはSD01のみしか検出されておらず、武家地利用の実態は明確にはできなかった。

## 文献

- 川越俊一1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』
- 佐藤亜聖1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』11
- 菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』
- 藤澤良祐1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
- 埋蔵文化財天理教調査団1985「考古学調査研究中間報告」11
- 大和郡山市教育委員会2007『額安寺第5・7次 郡山城第43次』



写真1  
郡山城と調査地（真上から）  
1997年撮影



写真2  
郡山城と調査地（北上空から）  
1986年撮影



写真3  
郡山城と調査地（南上空から）  
1986年撮影



写真4  
調査前全景（北西から）



写真5  
試掘確認トレンチ全景  
（北西から）



写真6  
試掘確認第1トレンチ全景  
（西から）



写真7  
試掘確認第2トレンチ全景  
(北から)



写真8  
本調査区全景(北から)



写真9  
SX01, 03(北西から)



写真10  
SX02 (北から)



写真11  
SK01 (南から)



写真12  
SK02 (南西から)



写真13  
SD01 (試掘確認トレンチ・  
北から)



写真14  
SX02全景 (北から)



写真15  
SX02東壁 (北西から)



写真16

SX02西壁（北東から）



写真17

SX03全景（西から）



写真18

SX03（南から）



写真19

SX03断割の状況（北から）

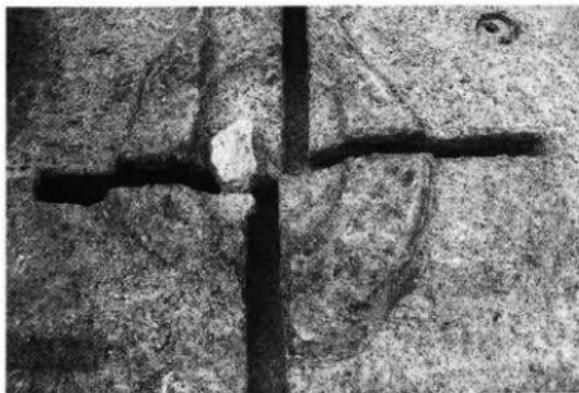


写真20

SX03断割の状況（東から）



写真21

SX03断割の状況（東から）



写真22  
SX03断面（北から）



写真23  
SX03断面（西から）



写真24  
SX03完掘後（北から）

写真25 出土遺物(1)

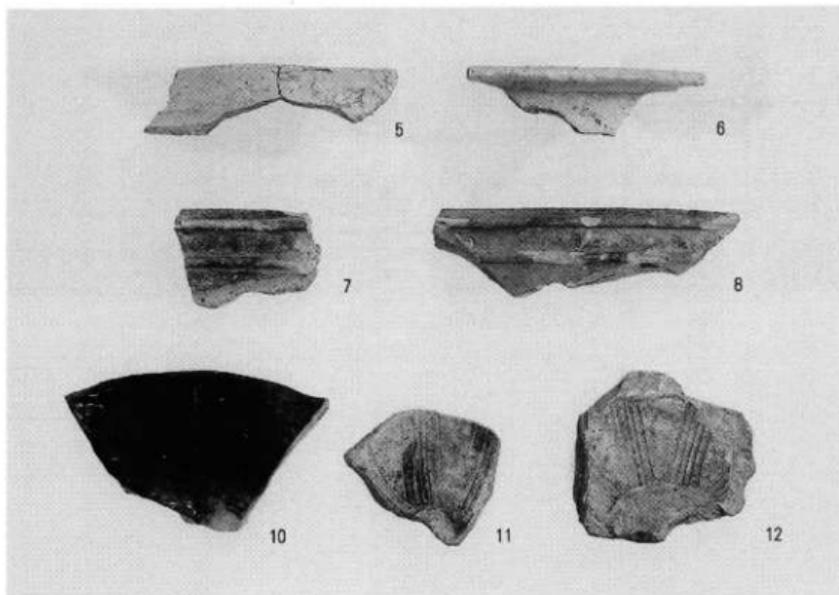
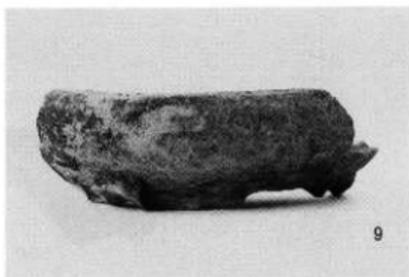
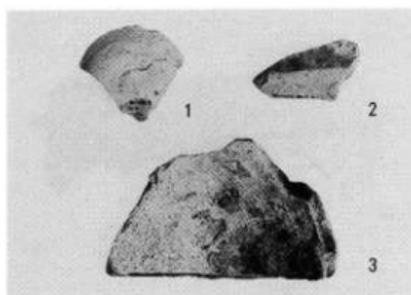


写真26 出土遺物(2)

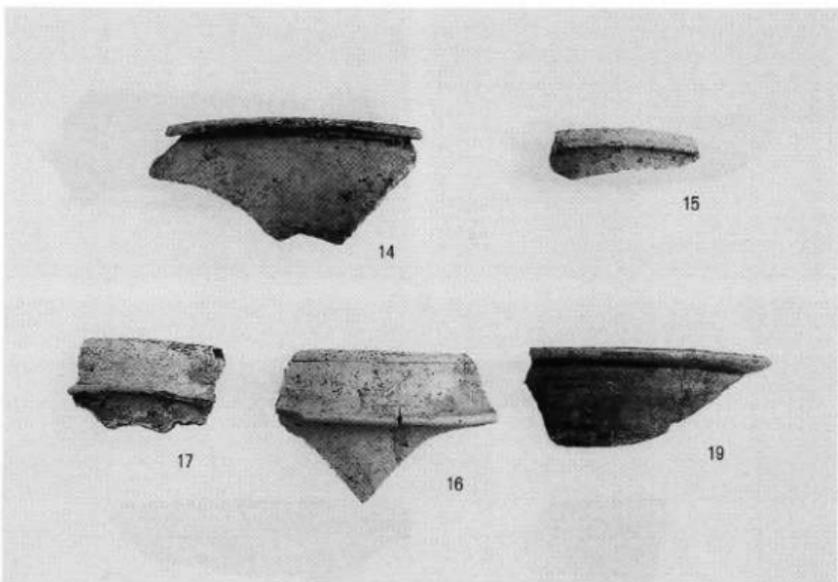
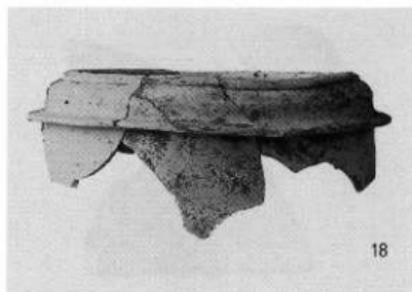
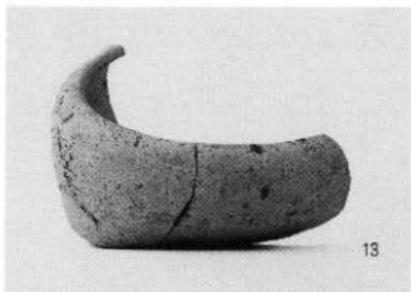
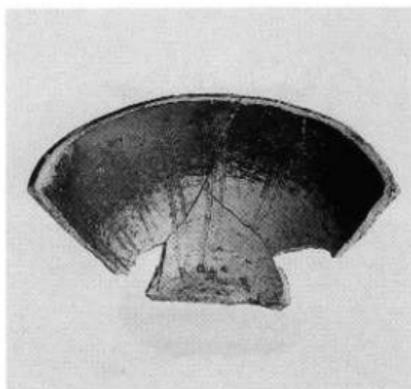


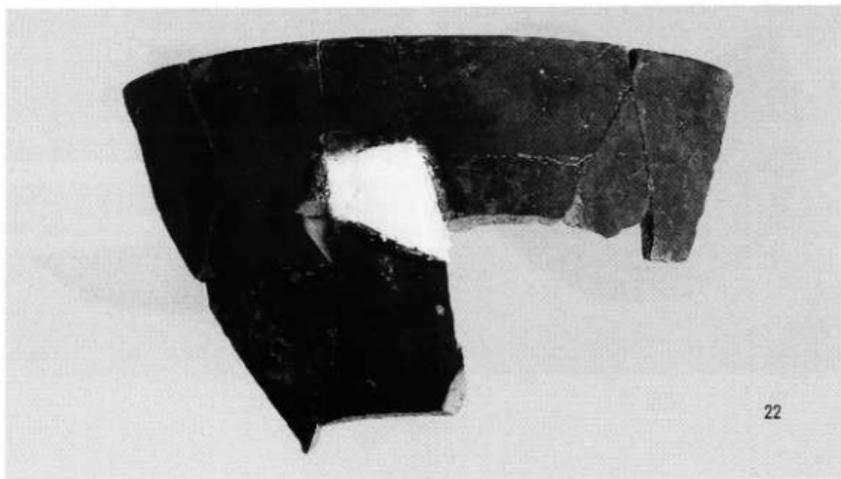
写真27 出土遺物(3)



20



21



22

写真28 出土遺物(4)

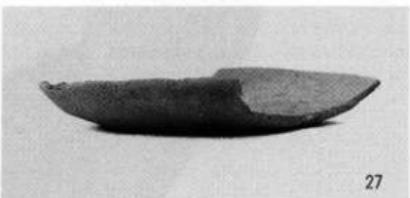
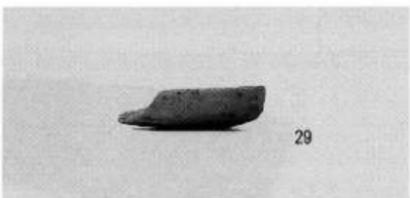
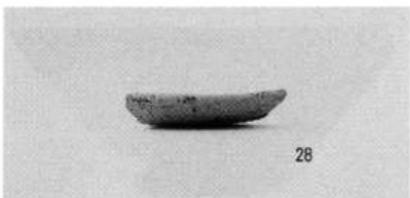
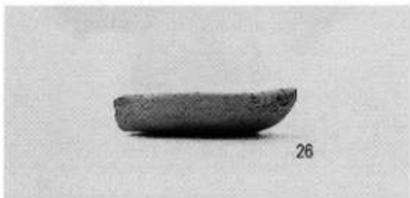
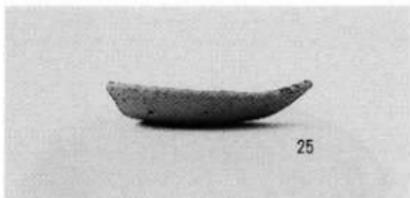
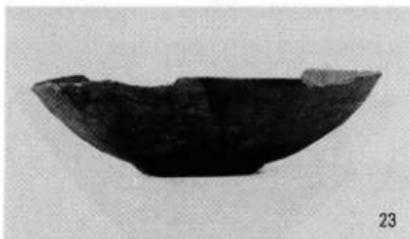


写真29 出土遺物（5）

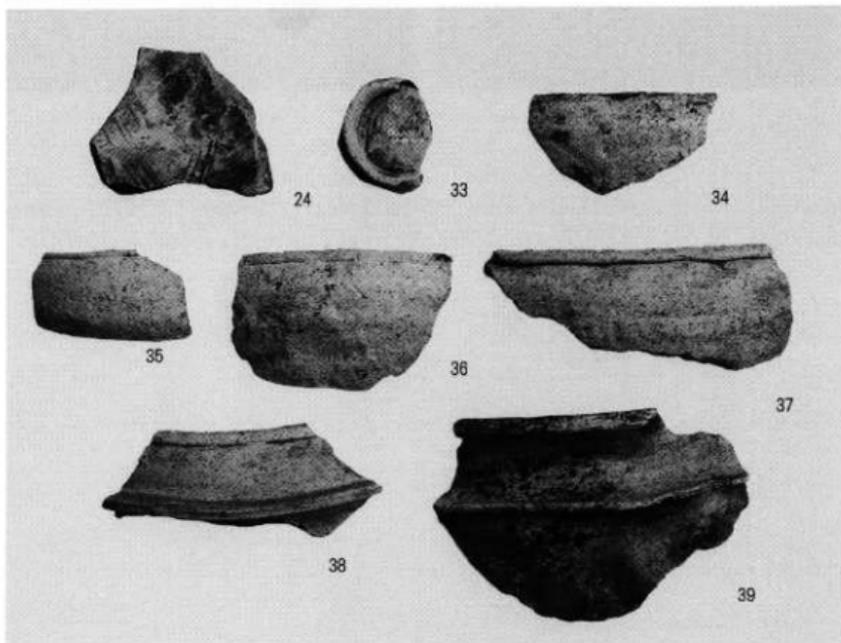
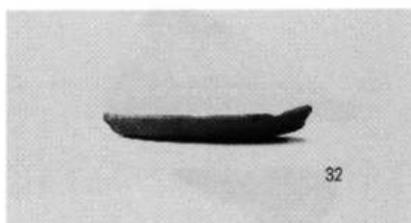
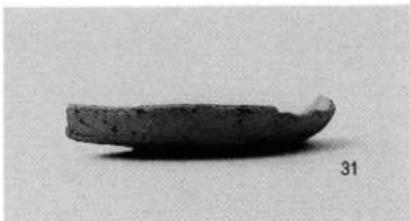
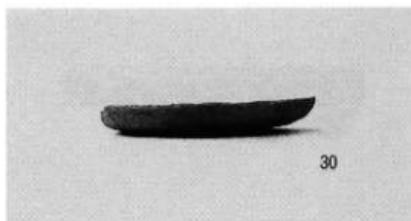


写真30 出土遺物(6)

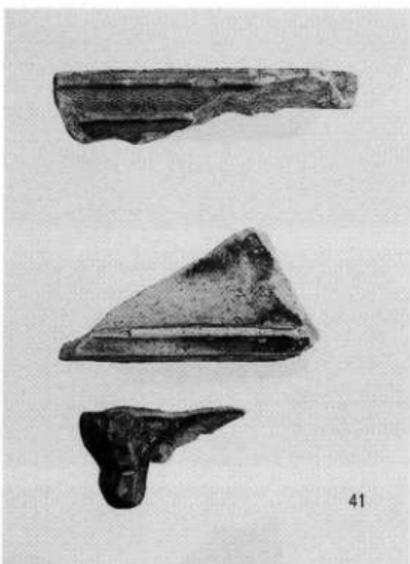
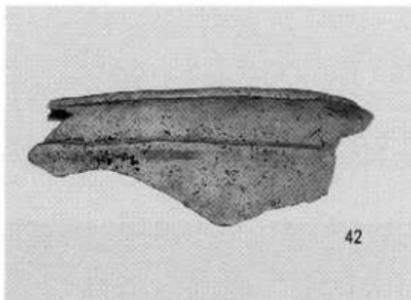
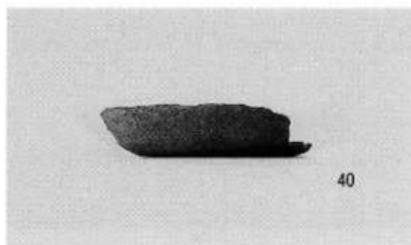


写真31 出土遺物（7）

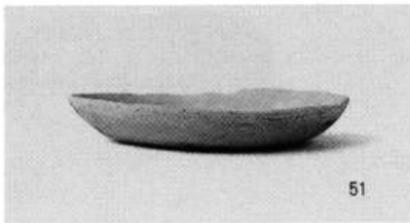
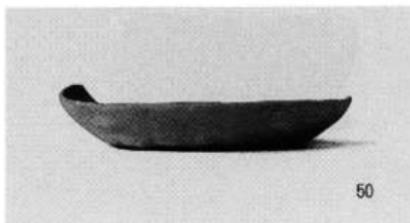
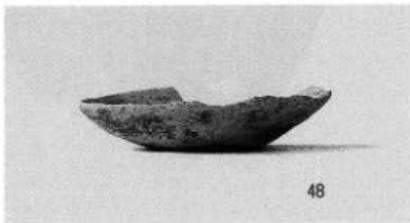
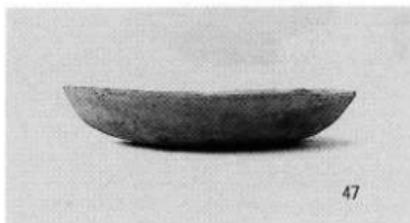
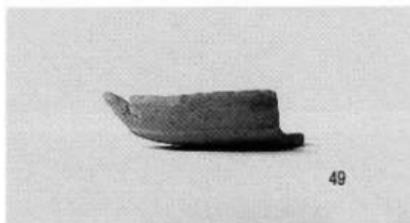
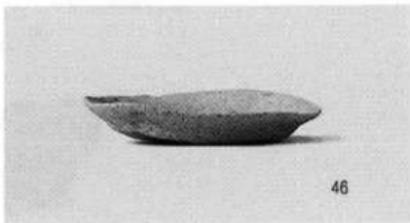
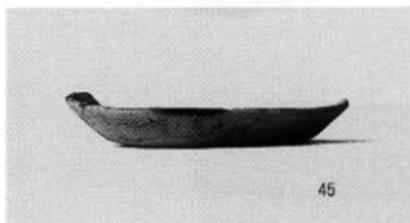
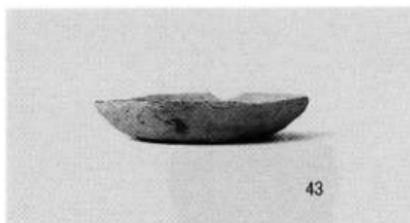


写真32 出土遺物(8)

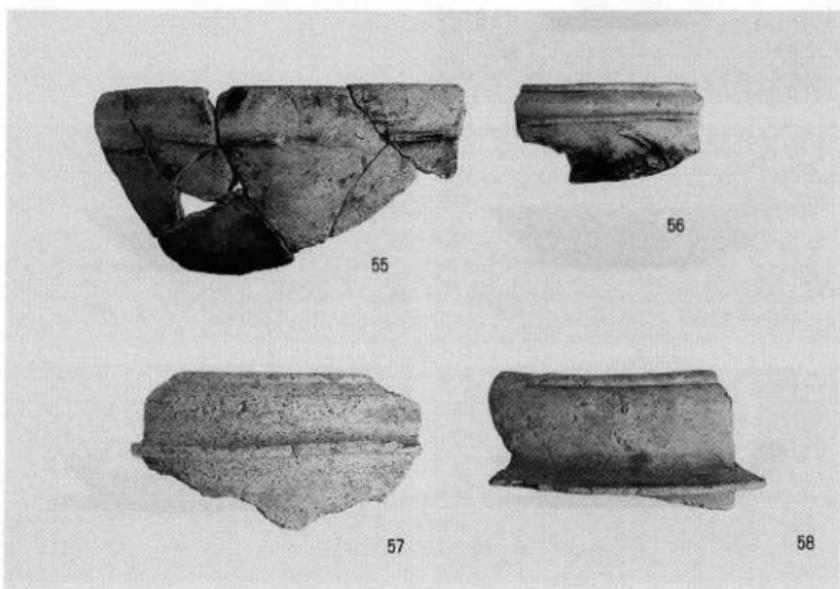
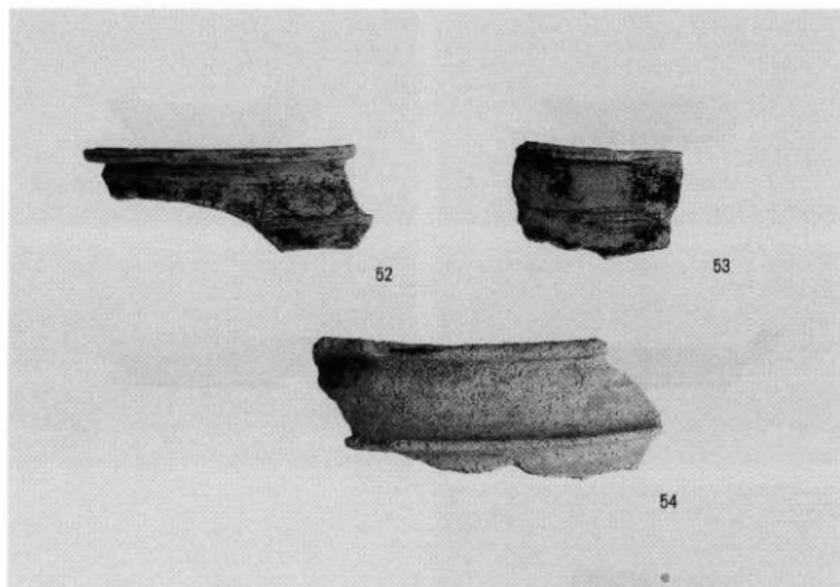
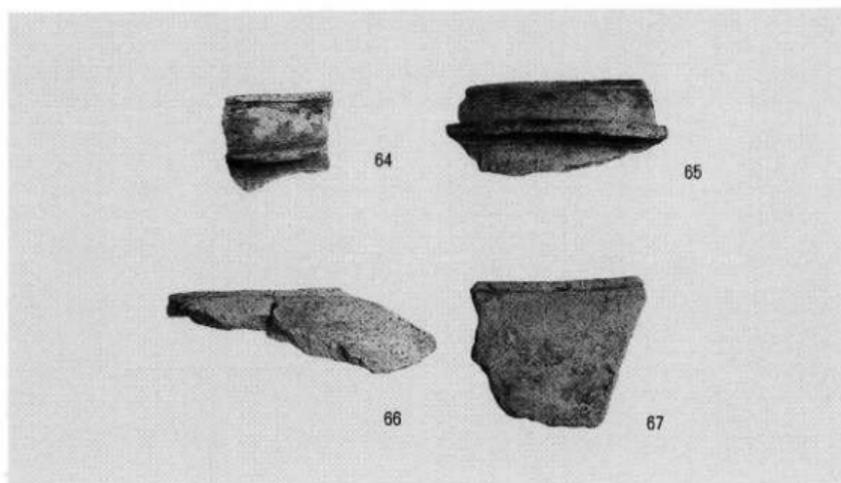
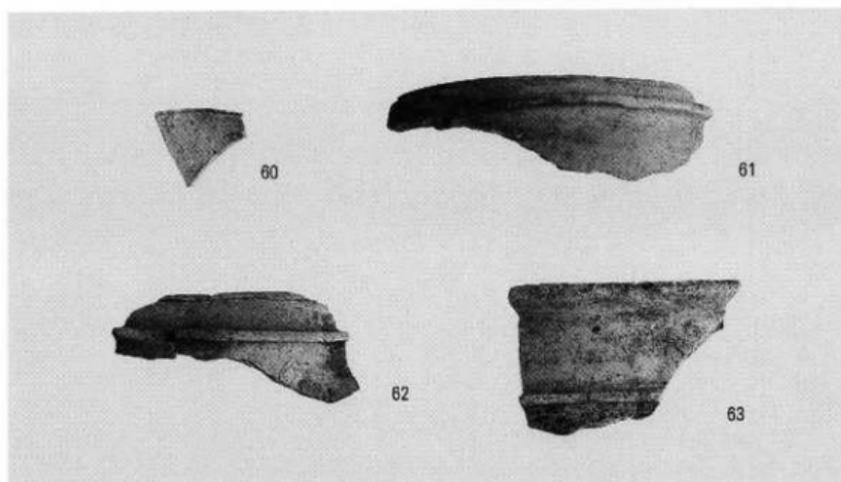


写真33 出土遺物（9）





## 報告書抄録

ふりがな	こおりやまじょうだいごじゅうきゅうじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	郡山城第59次発掘調査報告書
副書名	(仮称) 霞ヶ丘建替団地新築工事に伴う調査
巻次	
シリーズ名	大和郡山埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	12
編著者名	服部伊久男・長谷川義明
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1198 大和郡山市北郡山町248-4
発行年月日	2007年12月25日

所収遺跡名	<small>こおりやまじょう</small> 郡山城第59次
所在地	<small>奈良県大和郡山市冠山町字大職冠598-6</small> 奈良県大和郡山市冠山町字大職冠598-6
市町村	29203
遺跡番号	—
北緯	34° 39' 01"
東経	135° 46' 31"
調査期間	試掘確認調査：2003. 10. 5～10. 31    本調査：2004. 10. 25～11. 30
調査面積	試掘確認調査：258㎡    本調査：180㎡
調査原因	市営住宅建設
種別	城館
主な時代	中世
主な遺構	土坑、井戸
主な遺物	土器類
特記事項	中世の遺構を検出

## 郡山城第59次

—(仮称)霞ヶ丘建替団地新築工事に伴う調査—  
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

2007年12月25日 発行

著作権所有 大和郡山市北郡山町248-4

発行者 大和郡山市教育委員会

印刷者 奈良市三条大路2丁目2-6  
共同精版印刷株式会社